

日本語母語話者・日本語学習者による程度副詞の使用実態  
— 人間関係に応じた使い分けに注目した『YNU 書き言葉コーパス』調査 —

日暮 康晴

要 旨

『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』(YNU コーパス) を使用し、日本語母語話者・日本語学習者による程度副詞の使用実態調査を行った。本研究では特に人間関係に応じた使い分けに焦点を当て、母語話者、韓国語を母語とする学習者、中国語を母語とする学習者の副詞の使用実態を分析した。調査の結果、3者に共通して高頻度で用いられる副詞のうち「たくさん」、「すごく」、「もっと」、「ちょっと」の4語に、人間関係による使用傾向における母語別の差が確認された。用例分析を通じた具体的な分析からは、母語話者と学習者の副詞使用傾向の異なりは人間関係重視か伝達内容重視か、といった指向される要素の違いによって起こると考えられ、指導においては学習者の意図を踏まえた上で語の使用における待遇的な視点の重要性を示すことの必要性が示唆された。

【キーワード】 書き言葉 YNU コーパス 副詞 程度副詞 人間関係

The Usage of Degree Adverbs by Japanese Native Speakers and  
Japanese Learners:  
Research of “YNU written language corpus” focusing on the use  
of adverbs according to human relationships

HIGURE Yasuharu

**[Abstract]** This study used the “Corpus of Task-based Writing for Japanese Language Education” to investigate the use of degree adverbs by native speakers and learners of Japanese. The results of the study, which focused on the tendency to use adverbs according to human relationships, confirmed differences in the tendency to use 'takusan', 'sugoku', 'motto', and 'chotto' by the writer's mother language. Detailed analysis of the usage examples revealed that the adverb usage tendencies of native speakers and learners differ according to what they value. It was also suggested that there is a need to demonstrate the importance of a perspective of politeness in teaching.

**[Keywords]** Written Japanese, YNU corpus, degree adverbs, relationships

## 1. はじめに

日本語学習者（以下、学習者）にとって、文体・場面に応じた副詞の選択は難しいとされる（中俣 2016、中俣 2020）。それは、これまでの日本語教育において副詞が教授項目として注目されてこなかったという日本語教育側の問題でもあるが（大関 1993、朴 2019）、副詞の使い分けに関しては多様な要素が関わっているという副詞そのものに内在する難しさもその要因として挙げられる。副詞の使い分けには言語使用場面や聞き手・読み手との人間関係などに関わる社会言語学的な軸である「あらたまり／くだけ」の軸や、文体による「かたい／やわらかい」の軸など様々な要素が関わる（石黒 2015）。学習者に対して日本語教育を行う側にとっては、上記のような軸に従い、どのような時にどのような語を使うべき／べきでないのかという情報を踏まえて指導を行う必要がある。無論、闇雲に日本語母語話者（以下、母語話者）のようであれとする母語話者至上主義的な姿勢は望ましいものではない。しかし、学習者が予期しない形で母語話者をはじめとする他の日本語使用者と摩擦・衝突を起こしてしまうことは避けられるべきである。そのような観点から母語話者と学習者それぞれの言語使用実態の異同を捉えるという姿勢は、より良い日本語教育に向け必要なことであろう。また、社会言語学的な側面から副詞の使用実態を明らかにすることは、学習者の日本語を用いた社会生活を支えるための教育内容を考える上でも大きな意義を持つ。以上より、本研究は母語話者と学習者による書き言葉産出に注目し、読み手との人間関係に応じた副詞の使用傾向についての調査を行う。それを通して、日本語教育における副詞指導において人間関係に応じた指導が求められるのか、求められるとするならばどういった点に注意すべきかといった点を明らかにする。

## 2. 先行研究及び本研究の研究課題

本章では主に、母語話者と学習者の書き言葉における副詞使用に注目した先行研究を概観し、本研究の研究課題を設定する。日本語教育研究の枠組みの中でも、書き言葉における副詞の使用実態に着目した研究はアカデミックライティングに注目した前坊（2008）、渡辺（2010）、特定の語の使用実態に注目した陳・中俣（2017）など種々あるが、本章では書き言葉コーパスを使用した近年の研究として島崎（2022）、趙（2023）を挙げる。

島崎（2022）は『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』（I-JAS）内の書き言葉データを使用し、中国語母語の学習者、韓国語母語の学習者と日本語母語話者による副詞使用実態の調査を行った。その結果、学習者は日本語のレベルが上昇するにつれ副詞使用頻度が上がり、上級レベルでは母語話者よりも使用頻度が高い（副詞の過剰使用である）こと、語別の調査からは中国語母語話者はレベルが上がるにつれ過剰使用語が多く、過

少使用語が少なくなる傾向にある一方で、韓国語母語話者は過少使用語が多く、過剰使用語は少なくなることが明らかになっている。また、質的分析を含めたタスク別の比較からは、学習者は母語話者に比べてタスクによる副詞の使い分けを行っておらず、特に「初級で学習する副詞をタスクに関わらず繰り返し使用している」（島崎 2022;93）可能性が示唆された。

趙（2023）は『JCK 作文コーパス』、『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』の2コーパスを使用し、中国人上級学習者の副詞使用実態を量的な側面から調査した。その結果、中国人上級学習者は母語話者に比べて同じ副詞を多用する傾向にあること、「とても」、「もう」、「一番」、「もっと」、「もし」、「例えば」、「ずっと」、「よく」の使用頻度が両コーパスに共通して高いこと、情態副詞・陳述副詞・程度副詞のいずれにおいても母語話者と比較して過剰使用・過少使用語があることが明らかになった。

島崎（2022）、趙（2023）は両者ともにコーパスを使用し、書き言葉における母語話者と学習者の、また、島崎（2022）は学習者の母語の違いにまで注目し、副詞使用実態の異同を明らかにした。ただし、島崎（2022）の調査では対象とした文章は想定された読み手がない、もしくは目上の教師に限られたものであり、趙（2023）ではコーパス全体の量的側面に注目する形となり、読み手情報は捨象された分析となっている。副詞の使い分けに関する説明には「あらたまり／くだけ」の軸が用いられることが多い（cf. 飛田・浅田 2019）が、前述したように「あらたまり／くだけ」の軸は社会言語学的な軸であり、その基準における判断には言語使用場面における受け手、すなわち書き言葉であれば読み手とどのような関係にあるかということが強く関わっている。副詞の使用実態を明らかにする上で、読み手との人間関係の違いという視点を取り入れた比較分析の重要性は大きいと考えられる。また、書き言葉の中で副詞を使う上で、人間関係に応じてどのような語を使用すべき／べきでないといった両面の視点から学習者に対する注意を促すことは、実際の日本語使用に繋がる情報提供として、日本語教育の見地からも重要である。そこで、本研究では読み手との人間関係に応じた副詞使用傾向の違いに焦点を当て、母語話者と学習者の副詞使用実態を調査する。また、その際、人間関係に応じた使い分けという点でより問題になりやすい副詞に注目して調査を行う必要があると筆者は考える。そこで、本研究では程度副詞に絞って調査を行う。程度副詞は情態副詞・陳述副詞に比べて「あらたまり／くだけ」の軸による類義語を多く有し、その学習者による使い分けの問題は島崎（2022）の結果からも示唆され、本研究の調査においても教育に応用可能な結果が期待される。

以上より設定した本研究の研究課題は、「日本語書き言葉において読み手との人間関係に応じた副詞の使用傾向は書き手の母語によって異なるか」である。

### 3. 調査

#### 3.1 使用コーパス

##### 3.1.1 使用コーパスの概要

本研究では『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』（以下、YNU コーパス）を使用する。これは横浜国立大学で作成されたコーパスであり、コーパスは金澤編(2014) 付属の CD-ROM にて配布されている。

YNU コーパスは日本語母語話者 (NS) 30 名、韓国語母語話者 (KL) 30 名、中国語母語話者 (CL) 30 名の計 90 名に対して実施した 12 種類の作文タスクから収集した計 1080 編のデータで構築されており、タスク協力者はいずれも横浜国立大学に所属する大学生 (KL、CL は留学生) である (金澤編 2014)。各タスクの紹介は次節で行う。

##### 3.1.2 タスクの概要

先述の通り、YNU コーパスは 12 種類のタスクを通して得られた書き言葉データで構成されている (金澤編 2014)。本項では金澤編 (2014) を参考に、各タスクの詳細をまとめる。YNU コーパスのタスクは長さ、活動の種類別、読み手との関係など様々な観点で分類できる。本調査では読み手との人間関係に注目してタスクの分類を行う。次頁表 1 にタスク別の情報をまとめて示す。以下、表に挙げたそれぞれの項目について解説を行う。

「タスク内容」は金澤編 (2014) p.53 より引用したそれぞれのタスクの概要である。タスクの番号・順番は金澤編 (2014) に掲載された番号・順番に準拠している。

「読み手」はそれぞれのタスクにおいて想定される読み手との関係を示す分類で、金澤編 (2014) p. 7 に挙げられている。YNU コーパスでは各タスクごとに読み手の情報が詳細に設定されており、それらは以下の規準に従い分類される。読み手はまず「特定の相手か不特定の相手か」(金澤編 2014; 7) に分けられ、そのうち特定の相手の場合、「親疎関係 (目上か同僚・友人か)」(ibid.) によって分けられる。その結果、読み手は「特定・疎遠 (目上)」、「特定・親しい (同僚・友人)」、「不特定」の 3 つに分類される。本研究における「人間関係」も、この分類に従うものとする。ここには親疎関係と上下関係の 2 軸が含まれているとも考えられるが、語の使用傾向の違いを、特に「あらたまり／くだけ」の軸に注目して分析するにあたって、これらの軸を合一したより大きな軸として分類の規準とすることに支障はないと判断し、採用した。また、分類の表記は金澤編 (2014) にならい、それぞれを「疎 (目上)」、「親 (同)」、「不特定」とする。

「語数」は書き手の母語別の各タスクの語数である。YNU コーパスデータのタスクごとの語数は公式に公開されていないため、筆者独自の集計による。語数計測<sup>1</sup>には KH Coder を使用し、1080 の作文データひとつひとつに対して実施した。なお、語数計測の対象は書き手自らが執筆した箇所のみとし、タスク 3 の共通部分である「図 1 は、A 社

のデジタルカメラの販売台数についてのグラフである。」は集計対象から除外した。加えて、メール形式のタスク（タスク1、2、4、7、10、11）の件名部分は集計対象から除外した。なお、句読点や、！、「」などの記号は集計対象に含まれる。

表1 YNU コーパス タスク詳細

番号	タスク内容	読み手	語数 (NS)	語数 (KL)	語数 (CL)
1	面識のない先生に図書を借りる	疎(目上)	4,092	4,288	3,949
2	友人に図書を借りる	親(同)	1,952	2,965	2,968
3	デジカメの販売台数に関するグラフを説明する	不特定	2,857	3,509	2,981
4	学長に奨学金増額の必要性を訴える	疎(目上)	5,868	6,625	7,357
5	入院中の後輩に励ましの手紙を書く	親(同)	10,386	9,444	10,330
6	市民病院の閉鎖について投書する	不特定	7,231	7,393	7,454
7	ゼミの先生に観光スポット・名物を紹介する	疎(目上)	5,653	6,514	7,278
8	先輩に起こった出来事を友人に伝える	親(同)	2,608	2,846	2,967
9	広報誌で国の料理を紹介する	不特定	7,606	8,498	11,180
10	先生に早期英語教育についての意見を述べる	疎(目上)	5,134	5,516	6,036
11	友人に早期英語教育についての意見を述べる	親(同)	4,162	4,518	4,799
12	小学生新聞で七夕の物語を紹介する	不特定	15,397	12,434	14,167

「タスク内容」列の記述は金澤編（2014）p.53による。

### 3.2 副詞の集計作業

調査にあたって、YNU コーパスで使用される全副詞を確認・集計した。作業は全データを目視で確認し、含まれている副詞を集計するという流れで、すべて筆者1名（現役日本語教師かつ日本語教育専攻の博士後期課程大学院生）によって行った。テキストデータ内の特定品詞の抽出にはプログラムを使った方法などもあるが、本研究では後述のように形容詞の連用形など、副詞のカテゴリに入らないものも計測対象となり、また、同じ副詞語でも程度副詞の「とても」と陳述副詞の「とても」のように用法によって分けて集計を行う必要がある。そのため、設定した判断基準（後述）に沿った判断によって集計を実施する方が望ましいと考え、人力による直接集計とした。

判断基準には飛田・浅田（2019）を使用し、これに記載されている語を基本的な集計対象語とした。加えて、「すごく」、「はやく」のように形容詞の連用形で副詞として使用されているものも集計対象とした。また、「とても」／「とっても」や「すごく」／「すごい」のように形の違うもの、「もっと」／「もっともっと」のように単独使用・繰り返し使用の違いがあるものについて、これらの違いは主に書き手の感情やあらたまりの度合いによって生じていると考えられる（cf. 飛田・浅田 2019）。そのことは、本研究で注目する人間関係に応じた使い分けにも影響すると予想されるため、別々に集計した。ただし、「すぐ」／「すぐに」、「ゆっくり」／「ゆっくりと」のような接尾辞の有無の差異は違いとして扱わず、合算した。また、「まず」、「したがって」など接続詞として使用されている副詞は集計対象外とした。副詞の集計作業にあたって、3.1.2 で示した全体の



語数計測作業と同様、書き手が自ら執筆した本文部分のみを対象とし、タスク 3 の共通部分やメールの件名部分は対象としなかった。

### 3.3 調査の流れ

3.2 節の手続きによって集計した副詞のうち程度副詞の数値を母語話者別にまとめた。その上で、3 母語話者それぞれの中での使用数上位の語を確認し、3 母語話者間で共通して多く用いられている語、具体的には、3 母語話者それぞれの使用数上位 10 位の中に共通して確認された語 8 語に対し、母語 (NS / KL / CL) × 読み手 (親 (同) / 疎 (目上) / 不特定) のクロス表を作成し独立性の検定 (フィッシャーの正確確率検定) を実施した。そして、有意差が認められた語について使用頻度が特徴的なタスクでの用例に対して具体的な分析を行い、副詞使用の特徴を探った。

## 4. 結果と考察

### 4.1 程度副詞全体の使用傾向

表 2 に母語別の副詞使用数の集計結果を示す。延べ語数と異なり語数を示し、延べ語数には確認された数 (粗頻度) に加え、比較のための調整頻度 (10,000 語あたりの使用数) を示す。また、語彙の豊富さを図る指標 (石川 2021) として、異なり語数を延べ語数で割った値 (TTR) を示す。

表 2 に示した結果からは、延べ語数としては  $CL > KL > NS$  の順に数値が大きい。つまり、学習者は母語話者に比べ程度副詞の使用が高頻度であり、特に CL は KL よりも高頻度で程度副詞を使用していることが分かる。一方で、TTR 値に注目すると、NS と学習者 (CL・KL) の間には差が見られるもの、学習者間の差は比較的小さい。ここからは、母語話者は学習者に比べて程度副詞の語彙数が豊富であること、逆に言えば、学習者は母語話者に比べて少ない語彙を用いてタスクに取り組んでいるという先行研究 (島崎 2022、趙 2023) で得られた結果に共通する傾向が、学習者の母語の違いに関わらず存在することが示唆された。

表 2 程度副詞使用数集計結果

	日本語母語話者 (NS)	韓国語母語話者 (KL)	中国語母語話者 (CL)
延べ語数 (調整頻度)	494 (67.72)	556 (74.58)	690 (84.70)
異なり語数	61	54	68
異なり語数 / 延べ語数	0.123	0.097	0.099

※カッコ内は調整頻度 (10,000 語あたりの使用数)

次に、NS、KL、CL それぞれの中で使用数が多い語 10 語を表 3 に挙げる。なお、便

宜的に順位は上から1-10位としたが、NSの「いちばん」、「ちょっと」、「より」、CLの「ひじょうに」、「もっと」は同値となっており、それぞれの順位は50音順となっている。ここでも使用回数は粗頻度に加え、調整頻度（10,000語あたりの使用数）を付す。

表3 母語別程度副詞使用数および頻度（上位10語）

順	NS (日)		KL (韓)		CL (中)	
	語	使用数	語	使用数	語	使用数
1	とても	116(15.90)	とても	72(9.66)	とても	116(14.12)
2	たくさん	45(6.17)	もっと	61(8.18)	いちばん	75(9.21)
3	たいへん	29(3.98)	すごく	54(7.24)	すこし	46(5.65)
4	すこし	24(3.29)	いちばん	47(6.30)	すごく	37(4.54)
5	すごく	20(2.74)	たくさん	36(4.83)	ちょっと	35(4.30)
6	もっと	18(2.47)	すこし	22(4.43)	いっぱい	34(4.17)
7	いちばん	16(2.19)	ちょっと	20(4.02)	たくさん	33(4.05)
8	ちょっと		より	26(3.49)	ひじょうに	29(3.56)
9	より		たいへん	20(2.68)	もっと	
10	ほぼ		14(1.92)	ぜんぶ	15(2.01)	たいへん

※カッコ内は調整頻度（10,000語あたりの使用数）

表3の結果からは、使用数の多い語の各母語話者間の共通性の高さが認められる。上位10語のうち「とても」、「たくさん」、「たいへん」、「すこし」、「すごく」、「もっと」、「いちばん」、「ちょっと」の8語が3話者に共通して確認される。特に「とても」はNS、KL、CLに共通して最も多く使用されているという点でも共通している。中俣（2016）、石川（2020）などの話し言葉に対する研究では、「とても」は母語話者による使用が少なく、学習者の過剰使用語として確認されているが、今回の書き言葉に対する調査結果では異なる傾向を得た。さらに、具体的な使用頻度に注目すると「とても」はNSで調整頻度15.90回、KLで9.66回、CLで14.12回と、NSでの使用頻度が最も高い。加えてNSの結果では使用数2位の「たくさん」の2.5倍以上と程度副詞の中でも顕著に使用が多い。島崎（2022）では母語話者による「とても」の使用頻度は調査対象となった全副詞の中で4番目に多く、程度副詞に限定すると頻度1位の「大変」（調整頻度20回）に次いで2位（同頻度9回）となっている。島崎（2022）の対象としたI-JAS書き言葉データはストーリーライティング・エッセイ・メールが対象となっており、「大変」は特にメールでの副詞使用数が多いことが報告されている。今回調査対象としたYNUコーパスのデータは目上の人間に対するメールだけでなく、友人に対するメールの他、不特定の読み手に対する投書やレポートなど読み手・文章の種類が多様である。そのことがコーパス間の「大変」の頻度の違いに影響したと考えられる。今回の結果からは、様々な読み手に対する書き言葉産出の集合の中で、「とても」は母語話者・学習者に共通して高頻度で使用され、特に母語話者は程度副詞の中で顕著に多く使用するとまとめることができる。

## 4.2 語別の使用傾向

表4は、表3で確認した上位使用語 10 語のうち、3 母語話者グループすべてに共通して確認された 8 語の母語・人間関係別の使用数集計結果である。各セル内に粗頻度と調整頻度（カッコ内；1,000 語あたりの使用数）を示す。さらに、それぞれの語のクロス表に対して実施した検定（フィッシャーの正確確率検定）結果を合わせて示す。検定における有意水準は  $\alpha = 0.05$  である。なお、フィッシャーの正確確率検定では P 値は直接計算によって算出され、推定における効果量の記載は必要ない（城戸・池田 2022）ため、本研究でも効果量の算出・記載は行わない。

表4に示すように、調査対象とした 8 語のうち「たくさん」、「すごく」、「もっと」、「ちょっと」の 4 語に有意差、つまり、読み手との関係に応じた使用傾向の母語による異なりが確認された。次節以降、この 4 語それぞれに注目し、より詳細に使用実態の分析を行う。

表 4 母語・人間関係別副詞使用数および検定結果

	人間関係	NS	KL	CL	結果
とても	親（同）	7(3.7)	7(3.5)	20(9.5)	$p = .079$ 有意差なし ( $p > .05$ )
	疎（目上）	36(17.4)	17(7.4)	29(11.8)	
	不特定	73(22.1)	48(15.1)	66(18.4)	
いちばん	親（同）	6(3.1)	10(5.1)	19(9.0)	$p = .467$ 有意差なし ( $p > .05$ )
	疎（目上）	5(2.4)	22(9.6)	25(10.2)	
	不特定	5(1.5)	15(4.7)	31(8.7)	
たくさん	親（同）	13(6.8)	4(2.0)	8(3.8)	$p = .004$ 有意差あり ( $p < .01$ )
	疎（目上）	13(6.3)	26(11.3)	17(6.9)	
	不特定	19(5.7)	6(1.9)	8(2.2)	
すごく	親（同）	17(8.9)	23(11.6)	7(3.3)	$p = .000$ 有意差あり ( $p < .01$ )
	疎（目上）	2(1.0)	9(3.9)	13(5.3)	
	不特定	10(3)	22(6.9)	17(4.8)	
もっと	親（同）	3(1.6)	23(11.6)	8(3.8)	$p = .002$ 有意差あり ( $p < .01$ )
	疎（目上）	3(1.4)	28(12.2)	15(6.1)	
	不特定	12(3.6)	10(3.1)	6(1.7)	
すこし	親（同）	4(2.1)	8(4.0)	13(6.2)	$p = .075$ 有意差なし ( $p > .05$ )
	疎（目上）	7(3.4)	13(5.7)	6(2.4)	
	不特定	13(3.9)	12(3.8)	27(7.5)	
ちょっと	親（同）	11(5.8)	14(7.1)	21(10.0)	$p = .003$ 有意差あり ( $p < .01$ )
	疎（目上）	0(0.0)	14(6.1)	7(2.8)	
	不特定	5(1.5)	2(0.6)	7(2.0)	
たいへん	親（同）	1(0.5)	2(1.0)	2(0.9)	$p = .899$ 有意差なし ( $p > .05$ )
	疎（目上）	19(9.2)	12(5.2)	16(6.5)	
	不特定	9(2.7)	6(1.9)	10(2.8)	

※カッコ内は調整頻度（1,000 語あたりの使用数）



#### 4.2.1 たくさん

表5にタスク別の各母語話者の「たくさん」使用数を、調整頻度（カッコ内数値）と併せて示す。なお、本項以降調整頻度の算出は断りがない限り各話者の当該タスク別に算出した1,000語あたりの使用数である。なお、表5は読み手との関係（親（同）・疎（目上）・不特定）別に分けた上でのタスク番号順となっており、総計以外のタスク別のセルは調整頻度の多寡に従いヒートマップ形式で着色してある。以下同様である。

表5に示した結果からは、NS・CLによる「たくさん」の使用はタスク8、7において特に多いことが分かる。KLはこの2タスクで異なった傾向をみせ、タスク8ではNS・CLに比べて頻度が低い。タスク7では反対に、NS・CLよりも高頻度で「たくさん」の使用が確認された。本研究ではタスク8、7における「たくさん」の具体的な用例に注目し、分析を行う。

表5 母語・タスク別「たくさん」使用数

人間関係	タスク	NS	KL	CL
親	2	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	5	8(0.8)	2(0.2)	2(0.2)
	8	5(1.9)	1(0.4)	5(1.7)
	11	0(0.0)	1(0.2)	1(0.2)
疎	1	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	4	3(0.5)	4(0.6)	4(0.5)
	7	10(1.8)	20(3.1)	12(1.6)
	10	0(0.0)	2(0.4)	1(0.2)
不特定	3	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	6	6(0.8)	0(0.0)	0(0.0)
	9	5(0.7)	5(0.6)	4(0.4)
	12	8(0.5)	1(0.1)	4(0.3)
総計		45(0.6)	36(0.5)	33(0.4)

※カッコ内は調整頻度（1,000語あたりの使用数）

タスク8は酒を飲みすぎた先輩についての情報をメールで友人に伝えるタスクであり、「たくさん」は飲酒量の強調のために使用されるという傾向はどの話者にも共通している。

- (1) なんか会社の新入社員歓迎会でたくさん飲まされて、その後カラオケに行ったら  
回っちゃって倒れたんだって！ [J002\_8]<sup>2</sup>
- (2) たぶんそこでお酒をたくさん飲んで結局カラオケで歌っていたところ倒れそう。  
[K021\_8]
- (3) 先週、先輩は新入社員歓迎会に出て、たくさん飲まされたから、二次会のカ  
ラオケで歌いながら急に倒れたよ！ [C003\_8]

ただし、上述したように KL のタスク 8 における「たくさん」の使用は少なく、例 (2) の 1 回のみである。KL がタスク 8 で頻用する「たくさん」の類義語は「いっぱい」(使用数 6 回、調整頻度 2.1 回) である。また、CL もタスク 8 での「いっぱい」の使用は 11 回(調整頻度 3.7 回) と多い。一方、NS の「いっぱい」使用数は 3 回(同頻度 1.2 回) と、唯一「いっぱい」の使用頻度が「たくさん」よりも少ない。「いっぱい」は比較的くだけた印象の強い話し言葉的表現(飛田・浅田 2019) であり、学習者は量を示す副詞としてより話し言葉的な表現を選択しており、特に KL にその傾向が強いとまとめられる。

一方でタスク 7 では KL による「たくさん」の使用が多い。タスク 7 での「たくさん」の使用は例 (4) ~ (6) に挙げるようにいずれの話者も自分のおすすめに関する情報の修飾が中心で、大きな差異は認められない。また、タスク 8 のように、代わって多用される類義語も認められなかった。

- (4) とても素晴らしい所なので見所はたくさんあります！ [J007\_7]
- (5) 仁寺洞は、韓国伝統のものがたくさんある所です。 [K039\_7]
- (6) 東方明珠テレビタワー：(上海の代表的な建物です。市の中心に立ち、周囲も  
にぎやかな繁華街たくさんあります) [C042\_7]

KL の先生相手(タスク 7) には「たくさん」を、友人相手(タスク 8) には「いっぱい」を多く使用するという傾向からは、相手によって副詞の使い分けを行おうとしている姿勢が見て取れる。また、この姿勢は CL のタスク 8 で「いっぱい」が「たくさん」よりも多く使用されるという結果にも共通して表れていると考えられる。一方で、NS はタスク 7・8 に共通して「たいへん」が使用されるが、ここからは、NS にとって「いっぱい」は話し言葉的な語であり、書き言葉には不適であるという語感が働いていると考えられる。以上の考察からは、書き言葉・話し言葉というレジスター性と、相手による使い分けの異なる要素を区別して示すことの重要性が示唆される。

## 4.2.2 すごく

表6に、タスク別の各母語話者による「すごく」の使用数を示す。「たくさん」と同様に調整頻度（1,000語あたりの使用数）を付す。

表6に示した結果からは、母語によって「すごく」を使用するタスクの数が異なっていることが分かる。NSはタスク5・11・10・12の4タスクで「すごく」の使用が確認された。CLはタスク5・8・11・7・10・6・9・12の8タスク、KLは全タスクで「すごく」を使用している。「すごく」の使用頻度を確認すると、NS・KLはタスク5で、CLはタスク7で「すごく」を最も多く使用している。以下、具体的な用例から各話者による「すごく」の使用について分析を行う。

表6 母語・タスク別「すごく」使用数

人間関係	タスク	NS	KL	CL
親	2	0(0.0)	1(0.3)	0(0.0)
	5	15(1.4)	14(1.5)	3(0.3)
	8	0(0.0)	4(1.4)	1(0.3)
	11	2(0.5)	4(0.9)	3(0.6)
疎	1	0(0.0)	1(0.2)	0(0.0)
	4	0(0.0)	1(0.2)	0(0.0)
	7	0(0.0)	5(0.8)	10(1.4)
	10	2(0.4)	2(0.4)	3(0.5)
不特定	3	0(0.0)	1(0.3)	0(0.0)
	6	0(0.0)	4(0.5)	2(0.3)
	9	0(0.0)	9(1.1)	5(0.4)
	12	1(0.1)	8(0.6)	10(0.7)
総計		20(0.3)	54(0.7)	37(0.5)

※カッコ内は調整頻度（1,000語あたりの使用数）

母語話者の「すごく」の使用量は全20回のうち17回（85%）が親（同）への使用で、その中でもタスク5（後輩への励まし文）が15回と大部分を占める。タスク5の15例中13例は例（7）～（9）のように書き手が経験した感情や感覚に対する使用だった。

- (7) 私もすごく苦勞したから分かるんだよね。 [J001\_5]  
 (8) 気が焦っちゃう気持ちすごくよくわかります。 [J017\_5]  
 (9) 私も同じような経験をして、すごく不安になったよ。 [J018\_5]

KLはNSが「すごく」を使用するタスクでは同程度もしくはそれ以上に使用するが、NSによる使用がないタスクでの使用も認められ、使用傾向は一致しない。

KLの「すごく」使用もタスク5(調整頻度1.5回)で最も多い。具体的な用例も例(10)～(12)のようにNSと類似した、書き手自身の感情や感覚に対して用いられる例が過半数(14例中9例)であった。KLはタスク8においても「すごく」の使用がタスク5に近い頻度(同頻度1.4回)で確認される。NS、CLのタスク8での「すごく」の使用頻度はKLよりも低い、またはゼロであり、KLの使用頻度のみが高い結果となっている。

- (10) 一人一人自分の道を選んでいるのに私だけ途中で止まってしまった感じがして、すごくがっかりしていました。 [K003\_5]  
 (11) 僕の場合はバスケットで腕を折ったんですが、きき手の方だったのでテストの答案も書けず、すごく不安でした。 [K027\_5]  
 (12) まだ入院されてる木村くんのことを思ったらすごく残念で心が痛みます。 [K034\_5]

タスク8においてNSは例(13)、(14)のように「すごい」(4回、調整頻度1.5回)、「めっちゃ」(5回、同頻度1.9回)など、よりくだけた形の語を使用している。

- (13) なんか、会社の歓迎会すごい飲まされたらしいよー。 [J024\_8]  
 (14) 新入社員の歓迎会で上司からお酒めっちゃ飲まされたらしいよ…。 [J025\_8]

CLはNS・KLと異なり疎(目上)での「すごく」使用が最も多い。さらにその中でも、疎(目上)に対する「すごく」使用の13件中10件がタスク7での使用であった。タスク7は大学の先生に観光スポットをおすすめするタスクであり、以下例(15)～(17)のような用例が確認された。

- (15) すごく歴史の雰囲気を感じられます。 [C008\_7]  
 (16) 後は中国の料理がすごく多いので是非召しあがってくださいね！ [C013\_7]  
 (17) 大連はすごく有名な海辺都市できれいです。 [C026\_7]

CL に比べると頻度は半分程度となるものの、タスク 7 での「すごく」の使用は KL に  
も例 (18) ~ (20) のように確認された。

- (18) 最近、韓国はすごく寒いので、くれぐれもかぜ引かないようにお気をつけ  
ください。 [K003\_7]
- (19) ソウルでしたら、今日本人にすごく人気なスポットが“ミヨンドン”ですよ。  
[K023\_7]
- (20) 「ギョンジュパン」というおみやげがすごく有名で、おいしいです。 [K034\_7]

一方で、NS によるタスク 7 での「すごく」の使用はなかった。タスク 7 において NS  
に比較的多く確認された「すごく」の類義語は「とても」であり、30 回（タスク内調整  
頻度 5.3 回）認められた。これは、タスク 7 における KL の 10 回（同頻度 1.5 回）、CL  
の 17 回（同頻度 2.3 回）に比べて多いといえる。以下、用例を例 (21) ~ (23) に示す。

- (21) 渋谷や原宿は人がとても多く混雑していますが [J001\_7]
- (22) お昼時はとても混んでいます。 [J004\_7]
- (23) お団子はとても美味です。 [J008\_7]

以上の「すごく」およびその類義語の使用例からは、NS による「すごく」の使用は相  
手との人間関係に指向した使い分けとなっていることが示唆される。タスク 5 に見られ  
る「すごく」の用法は親しい相手に対して共感を示す、または自身の似た経験を述べる  
ための、書き手自身の感覚の強調という側面が強い。学習者は同様の使用も認められ  
るものの、一方で、タスク 7 のように目上の相手であっても話者にとって身近な情報を強  
調するために「すごく」を使用する例も見受けられる。つまり、学習者の「すごく」の  
使用は伝達内容により強く指向しており、相手による使い分けを母語話者ほどには行っ  
ていないことを示唆する結果であると言える。また、タスク 8 に確認された、母語話者  
がよりくだけた語を使用する状況で学習者（特に KL）は「すごく」の使用に留まってい  
るという点からは、目上に対しても「すごく」を使用するという傾向とは反対の、親し  
い相手に対するよりくだけた表現を使用語彙として備えていないことが示唆される。た  
だし、この点に関しては学習者がよりくだけた語を知りつつ使用を避けているという可  
能性も予想される。

#### 4.2.3 もっと

表 7 に、タスク別の各母語話者による「もっと」の使用数を調整頻度（1,000 語あた



りの使用数) を付して示す。

「もっと」の使用が特徴的なのはKLで、特にタスク11と4が多い。学習者、特にKLによる「もっと」の過剰使用は先行研究(陳・中俣2017)でも指摘されており、本研究でも同様の結果となった。タスク11は英語教育に関する意見を伝えるための友人へのメール、タスク4は奨学金増額の要望を伝えるための大学学長へのメールといったように、内容・読み手との関係は大きく異なる。また、実際の用例も以下に挙げる例(タスク11:例(24)～(26)、タスク4:例(27)～(29))のように一貫せず、意味的に使用可能なタイミングで、相手との関係によらず使用している様子が見えてくる。

表7 母語・タスク別「もっと」使用数

人間関係	タスク	NS	KL	CL
親	2	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	5	1(0.1)	12(1.3)	4(0.4)
	8	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	11	2(0.5)	11(2.4)	4(0.8)
疎	1	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	4	2(0.3)	16(2.4)	6(0.8)
	7	0(0.0)	4(0.6)	1(0.1)
	10	1(0.2)	8(1.5)	8(1.3)
不特定	3	0(0.0)	2(0.6)	0(0.0)
	6	4(0.6)	2(0.3)	4(0.5)
	9	2(0.3)	6(0.7)	2(0.2)
	12	6(0.4)	0(0.0)	0(0.0)
総計		18(0.2)	61(0.8)	29(0.4)

※カッコ内は調整頻度(1,000語あたりの使用数)

(24) もっと小さい時から英語を習い始めてたら、勉強のことは考えずに、もっと英語を楽しめることができたかもしれないのね。 [K003\_11]

(25) それにね、個人的として、子供の時期にもっと語学を勉強しとけばよかったなー！

と思っているからだよ！ [K005\_11]

(26) 変な韓国語を使ったりしたから子どもの場合ならもっとひどくなるんじゃないかな。 [K006\_11]

(27) 私たち留学生がもっと気楽に大学生活を楽しむことができるよう総長のご理解とご配慮をよろしくお願いいたします。 [K004\_4]

(28) 私たち留学生会は留学生たちの声をもっとよく聞くために週 1 回定期討議を行っています。 [K005\_4]

(29) お金の問題で困った留学生も多くなった為、学校からの留学生の為な支援をもっと要する意見がありました。 [K015\_4]

「もっと」は口語的であり、特にタスク 4 のように目上の人間に対するメールでは「より」などのより文章語的な表現の方がふさわしい (cf. 飛田・浅田 2019)。実際に「より」の頻度を確認すると、NS によるタスク 4 での「より」の使用は 9 回 (調整頻度 1.5 回) であり、「もっと」の 2 回 (調整頻度 0.3 回) よりも高い頻度となっている。また、KL の「より」のタスク 4 での使用は 7 回 (同頻度 1.1 回)、CL は 6 回 (同頻度 0.8 回) と、ここでも NS は相手との人間関係に応じた副詞の選択を行う傾向が学習者に比べ強いことが示唆される。

#### 4.2.4 ちょっと

表8に、タスク別の各母語話者による「ちょっと」の使用数を調整頻度と共に示す。

表8 母語・タスク別「ちょっと」使用数

人間関係	タスク	NS	KL	CL
親	2	4(2.0)	9(3.0)	18(6.1)
	5	6(0.6)	1(0.1)	2(0.2)
	8	1(0.4)	1(0.4)	0(0.0)
	11	0(0.0)	3(0.7)	1(0.2)
疎	1	0(0.0)	6(1.4)	2(0.5)
	4	0(0.0)	2(0.3)	4(0.5)
	7	0(0.0)	6(0.9)	1(0.1)
	10	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
不特定	3	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	6	0(0.0)	0(0.0)	3(0.4)
	9	4(0.5)	1(0.1)	2(0.2)
	12	1(0.1)	1(0.1)	2(0.1)
総計		16(0.2)	30(0.4)	35(0.4)

※カッコ内は調整頻度 (1,000語あたりの使用数)

表8に示した結果では、いずれの話者もタスク2での「ちょっと」の使用が最も多いことが特徴に挙げられる。タスク2は友人に本の借用を頼むメールであり、「ちょっと」は主に親しい相手への依頼行動において使われるとまとめることができる。ただし、その用例を確認すると、母語グループによって使い方に違いがあることが分かる。まず、例(30)～(32)にNSによるタスク2での「ちょっと」の例を挙げる。

- (30) ちょっとお願いしたいことがあって…。 [J002\_2]
- (31) ちょっとお願いがあって、メールしました♪ [J005\_2]
- (32) 図書館にないから、ちょっと借りてもいい？ [J023\_2]

NSは例(30)、(31)のように依頼メール冒頭の、本題に入る前触れの部分での使用が使用4回中3回で、1回が例(32)の依頼表現を含む文での使用であった。一方で、KL、CLは例(33)、(34)(以上KL)、例(35)、(36)(以上CL)のように依頼表現を含む文での使用の割合が母語話者に比べ高く、KLで9回中7回、CLで18回中9回が依頼文での使用であった。

- (33) その本があればちょっと貸してくれる？ [K011\_2]  
 (34) もしこの頃その本読んでないならちょっと貸してくださいね。 [K036\_2]  
 (35) ちょっと貸してもらえれば助かります。 [C001\_2]  
 (36) 一週間でいいから、ちょっと貸してくれない？ [C047\_2]

ここでは、「ちょっと」の用法の異なりについて山岡(2016)による意味拡張の概念を援用して考えたい。元々は低程度量を表す「ちょっと」の語用論的な意味の拡張について、山岡(2016)は、「今日はちょっと寒い」(山岡2016; 5)のように「ちょっと」の程度副詞としての意味のみを持つ「非配慮」用法、「君の書類、ちょっと雑だな」(ibid.)のように、「ちょっと」の程度副詞としての意味と、相手との摩擦を避けるためのポライトネス機能を同時に持つ「配慮拡張」用法、そして、(融資の依頼に対し)「その金額はちょっと無理かと思いますが。《断り》」(ibid.)のように、程度性はなく、単にポライトネス機能だけを有する「配慮特化」用法の3つに分類を行った。

この分類を踏まえて先に挙げたタスク2での「ちょっと」の使用を確認すると、母語話者は例(30)、(31)のように「配慮特化」としての「ちょっと」の使用に傾いていると言える。「お願いがある」ことはあるかないかの二択であり、そこに「ちょっと」が程度副詞として機能することはできない。ここでは、「ちょっと」は相手への負担を和らげるというポライトネスの機能のみが働いていると考えられる。対して、KL、CLで多く確認された依頼表現に付される「ちょっと」は、「配慮拡張」用法であると考えられる。タスク2において借用対象となる本は特定の1冊であり、「ちょっと」が冊数の程度を低程度に限定するとは考えにくい、「貸す・借りる」という行為がどれくらい継続するかという時間的範囲の程度に対するものだと考えれば、「ちょっと貸してもらえれば」は「短い期間貸してもらえれば」という表現としての解釈が可能である。そのような、低程度としての解釈可能性が残存しているという点で、「ちょっと貸してくれませんか」の「ちょっと」は「配慮拡張」と認められる。以上より、KL・CLは依頼という行動によって起こりうる相手との摩擦を、依頼文に「ちょっと」を付すことで緩和させようとしていると考えられる。しかし、このやり方では、本当に相手に迷惑をかける可能性を依頼者側から一方的に、いわば自分勝手に弱めて伝えていと受け取られる可能性が

あり、「ちょっと」による限定がむしろ聞き手との摩擦を増幅させてしまう可能性がある。母語話者が「ちょっと」の依頼表現への付加を行わないことには、そのような、借りるという行為が与える負担の程度を一方向的に決めないという理由が推察される。

また、同様の依頼を先生に対して行うタスク1ではNSの「ちょっと」の使用は見られず、KLで6回中3回、CLで2回中2回が前触れでの使用であった。ここからは、NSは友人への依頼メールにおいては「ちょっと」の使用は依頼の前触れでの「配慮特化」使用に限られ、目上の先生に対しては「ちょっと」の使用自体がない、一方で、学習者は友人に対しては「配慮拡張」・「配慮特化」として前触れでも依頼文でも使用し、目上に対しては「配慮特化」の割合が高くなるという、使用範囲の並行的なズレが示唆される。

## 5. まとめ

本研究では、人間関係に注目した書き言葉コーパス調査によって、母語話者・学習者の書き言葉における程度副詞の使用実態を分析した。本研究の研究課題「日本語書き言葉において読み手との人間関係に応じた副詞の使用傾向は書き手の母語によって異なるか」に対しては、『たくさん』、『すごく』、『もっと』、『ちょっと』の4語に、読み手との関係に応じた使用傾向の母語による異なりが確認された。用例に注目した詳細な分析からは、母語話者は読み手との人間関係に注目し、あらたまり・くだけの両方向に多様な副詞の使い分けを行っているが、学習者は意味的に使用可能な場面では読み手との関係に関わらず同じ語を使用する、もしくは母語話者と異なる規準で相手による使い分けを行う傾向にある」という回答が得られた。

たとえば、タスク7での学習者から先生に対する「すごく」の例は、学習者は（母語話者が「とても」を選択するところで）よりくだけた表現を自らの実感を伴う情報として活用していると捉えることもできる。ただし、実際の立場・人間関係であるべき言語使用の域を越えているとみなされた場合には読み手が書き手に対して抱く印象に負の影響を与えることにも繋がりがかねず、そのような点については明示的な指導が必要であろう。また、タスク8では母語話者は「すごい」、「めっちゃ」などよりくだけた語を使用する一方で、学習者は「すごく」の使用に留まるという差異も見られた。言語使用における「適切さ」には、リスクを避けるための丁寧な言語運用だけでなく、仲が良い相手とのくだけたコミュニケーションの取り方という視点も含まれ得るものであり、そのような視点からも、コミュニケーションに応じた語の選択に関する情報提供の重要性は高いといえる。本研究で確認された母語話者と学習者の差異からは、副詞の指導にあたって、意味的な側面だけでなく、待遇的な視点の重要性を示すことの必要性があらためて明らかになった。そしてその際には、「たいへん」にみられたように、話し言葉的・書き言葉的というレジスター性とは別の軸であることを示す重要性も併せて示唆された。



本研究では、書き手と読み手の人間関係について、金澤編（2014）に用いられている3分類の違いを母語話者・学習者に共通の前提として分析を行った。しかし、母語話者と学習者の言語使用を考えるにあたって、その前提自体に考慮すべき違いが存在している可能性もある。たとえば、母語話者が母語話者友人に抱く感覚と学習者が母語話者友人に抱く感覚との間に存在する差異や、「友人」と設定される人間関係においてどれだけくだけた言葉遣いができるかという意識の差異などである。より詳細な調査・分析にあたっては、これらの異なりから、各言語使用者がどのように語・表現を選択しているかを考えていく必要がある。また、本研究の調査では語の使用数を用いた分析を実施した。それゆえ、個人レベルの使用傾向が結果に影響を与えている可能性は否定できない。この点についても、今後は話者を集計単位とした調査・分析の可能性などが挙げられる。

また、本研究は程度副詞に限った調査であったが、今後は他の副詞カテゴリに焦点を当てた調査や、他の品詞、表現を対象とした調査など様々な発展可能性がある。人間関係に応じた語の選択は、日本語を用いて社会生活を送ってゆく中で必要不可欠な要素である。学習者の日本語使用を支えるため、今後のさらなる研究の発展を望む。

## 謝辞

本研究は、2023年7月に「第7回シンポジウム 未来志向の日本語教育」にて発表した内容に追加の分析を含めたものです。発表に際しコメントを下された皆様に御礼申し上げます。また、本研究は2021年度尚友倶楽部筑波大学日本語教育研究者育成奨学金およびJST次世代研究者挑戦的研究プログラムJPMJSP2124の支援を受けたものです。

## 注

1. KH Coderによる語の計測は厳密には形態素解析・集計であり、KH Coder内のChaSen、もしくはMeCabによって実行される(樋口2017)。本稿では便宜的に「語」とした。
2. 本研究における例文の引用では議論の中心となる副詞に下線・斜体処理を付す。また、コーパス内情報として協力者・タスクの情報を「協力者ID\_タスク番号」の形式で示す。

## 参考文献

- 石川慎一郎（2020）「発話における副詞の使用」迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬編『日本語学習者コーパス I-JAS 入門』くろしお出版：167-184
- 石川慎一郎（2021）『ベーシックコーパス言語学 第2版』ひつじ書房
- 石黒圭（2015）「書き言葉・話し言葉と『硬さ／軟らかさ』：文脈依存性をめぐって（特

- 集 ことばの「硬さ」「やわらかさ」』『日本語学』34(1):14-24
- 大関真理 (1993) 「日本語学習用教科書の副詞語彙」『言語文化と日本語教育』5:23-34
- 金澤裕之編 (2014) 『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』ひつじ書房 (※使用コーパスも同書に付属)
- 城戸颯・池田めぐみ (2022) 「教育工学研究における帰無仮説有意性検定と効果量」『日本教育工学会論文誌』46(3):579-587
- 島崎英香 (2022) 「書き言葉における日本語学習者の副詞の使用実態—I・JAS を用いて中・韓学習者を中心に—」『言語資源活用ワークショップ 2021 発表論文集』:76-95
- 陳建明・中俣尚己 (2017) 「程度を表す副詞の日中対照と日本語学習者コーパスの分析—話し言葉と書き言葉の違いに注目して—」『中国語話者のための日本語教育文法を求めて』日中言語文化出版社:95-124
- 趙海城 (2023) 「中国語を母語とする上級日本語学習者の書き言葉における副詞の使用実態—日本語母語話者との比較を通して—」『東アジア言語文化研究』(5):145-157
- 中俣尚己 (2016) 「学習者と母語話者の使用語彙の違い—『日中 Skype 会話コーパス』を用いて—」『日本語／日本語教育研究』(7):21-34
- 中俣尚己 (2020) 「主成分分析を用いた副詞の文体分析」『計量国語学会』32(7):419-435
- 朴秀娟 (2019) 「初級日本語教科書における副詞の導入実態について」『神戸大学留学生教育研究』(3):21-34
- 樋口耕一 (2017) 「言語研究の分野における KH Coder 活用の可能性」『計量国語学』31(1):36-45
- 飛田良文・浅田秀子 (2019) 『現代副詞用法辞典 新装版』東京堂出版
- 前坊香菜子 (2008) 「レポートを書くときに学習者はどのように語を選択するのか:—副詞を中心として—」『日本語教育方法研究会誌』(15):16-17
- 山岡政紀 (2016) 「配慮表現の慣習化と原義の喪失をめぐる一考察」『日本語コミュニケーション研究論集』(5):1-9
- 渡辺史夫 (2010) 「論述文に現れた副詞の分析:留学生と日本人学生の作文より」『京都産業大学論集』(41):77-92